

すっかんぽ

1991年5月号

サンショウウオの 生存競争



5月20日月よう日の朝、職員室では、こんな会話が飛びかっていた。A「きのう、田植えに行ったら、おみやげに、サンショウウオも3匹もらったよ」 B「おれにくんねえか。エサは何くれんだい。」 C「-----」

聞けば、東京から団体で、田植えの体験にきたらしく、それに参加したA先生も、サンショウウオをもらってきたのである。しかし、数十人に3匹づつ配ると、おそらく、100匹をこす数となる。産卵期でないこの時期、そんなに大量に捕獲できる場所があったとしたら、その生態を知る上では、大発見である。また、"そんなに、くれちゃって、だいじなんかな"という気持ちも手っだって、A先生に場所をきき、その日の放課後、サンショウウオをつかまえた本入(Sさん)に直接あって話をきくことにしたのだ。

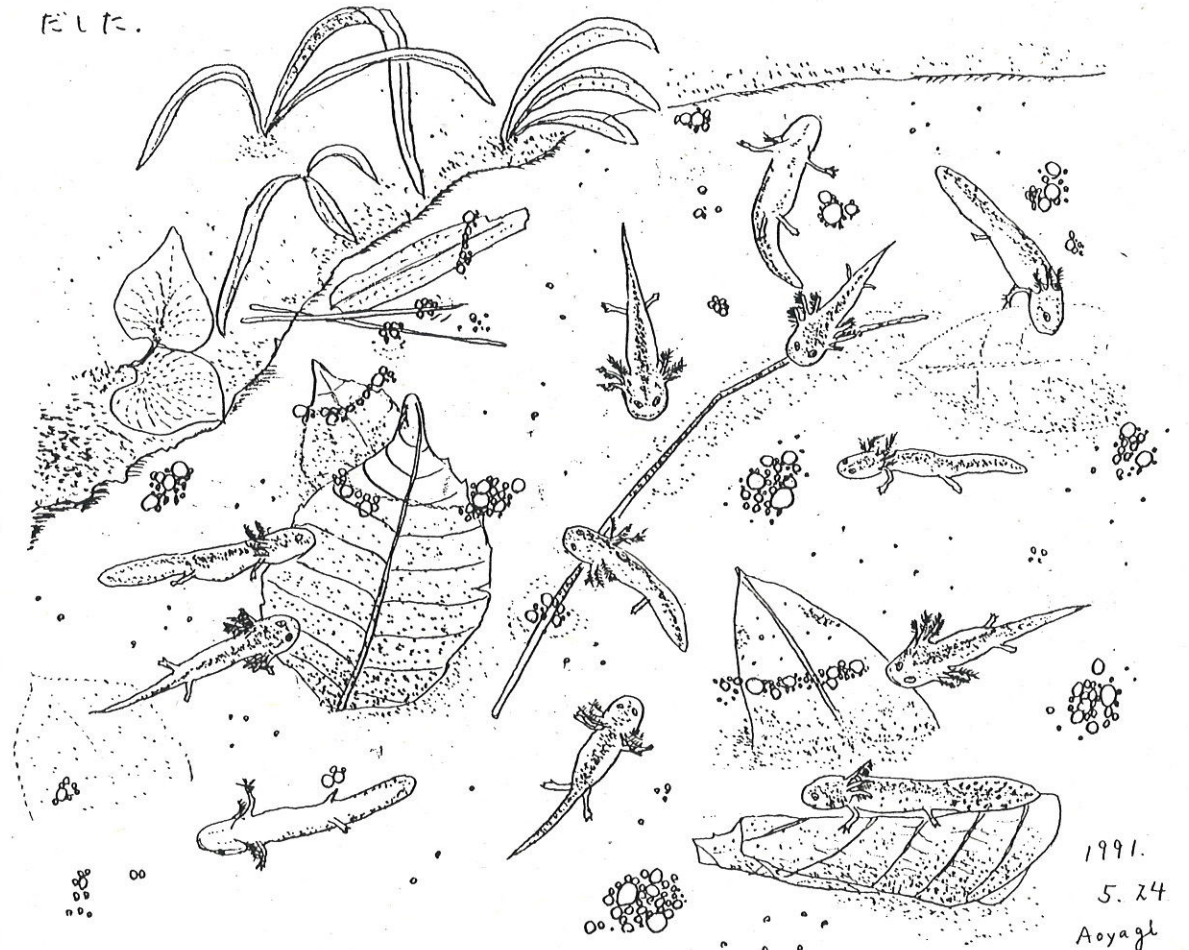


Sさんは、農作業の最中だったが、A先生の話をしたら、ちょっとれくさそうに笑って、「あーそうですか。じゃ、車であとをついてきて下さい」と親切にも、サンショウウオの捕獲地まで案内して下さった。着いた所は、普通の人家の庭先で、"え、こんな所に"という感じである。

「ほら、この水路にいますよ」 見れば、確かに、2,3センチのサンショウウオの幼生(おたまじゃくし)がいる。 とうやら、サンショウウオ3匹というのは、成体ではなくて、幼生だったらしい。

この辺りに生息しているサンショウウオは、トウキョウサンショウウオといって、三日月型の卵のうを2月下旬から3月下旬にかけて産卵している。1対の卵のうの中には、約50前後の卵が入っているんで、ふ化してくる幼生の総数は、膨大な数になるのだ。たとえば、岩舟のある産卵地では、約1m²の広さに30対の卵のうが生みつけられていたんで、全てふ化したとすると $30 \times 50 = 1500$ 匹になる。実際に何匹が幼生として成長しているのか、その産卵地で調査してみることにした。

そこには、下ッスケッチのように、おびただしい数の幼生が、ぷかぷかと水面に漂っていたが、あお向けになっているものもいた。死んでるのかなと思って、つついてみると、あわてて動きだした。



まだ、エラが残っているが、肺呼吸も始まっているのだから、下の方に
いる幼生も、時々、水面近くに浮き上がってくる。そこで
浮き上がってきた幼生も網でつくと、数をかぞえてみた。
その数 250。おそらく、まだ隠れているものを含めると、250
近くにはなるだろう。つまり、この時点で最初の1500
から $\frac{1}{6}$ の250に減ってしまったのだ。いったい、このうちの何匹
が親になれるのだろうか。



このほか、いくつかの疑問点があったので、日光の中禅寺
湖畔にある日本両棲類研究所（篠崎尚次所長）を訪ね
てみることにした。この研究所は、両生類の中でもサンショウウオ
を専門にあつており、日本のみならず世界中のサンショウウオ
が展示されているのだ。たまたま、所長の息子さんが、北海
道からとってきた、エゾサンショウウオの幼生約300匹も水そうに
移している所だったので、この中で何匹くらい成体になれるのか
きいてみた。この息子さんは、かなり話好きで、昔、NHKで
やっていたウオッチングという番組に出演していたという強者^{つわもの}
である。彼によれば、「10匹くらい親になれるは上出来で
しょう。エサは時々あげますが、彼らは、友食いによって大
きくなっていくんですよ。その中で最終的に強い者だけが残
ってゆき、子孫を残すことができるわけです。つまり、サンショ
ウウオが親になるためには、兄弟との生存競争に勝ち残らね
ばならないんですね。」

JAPAN AMPHIBIAN LABORATORY

NO.



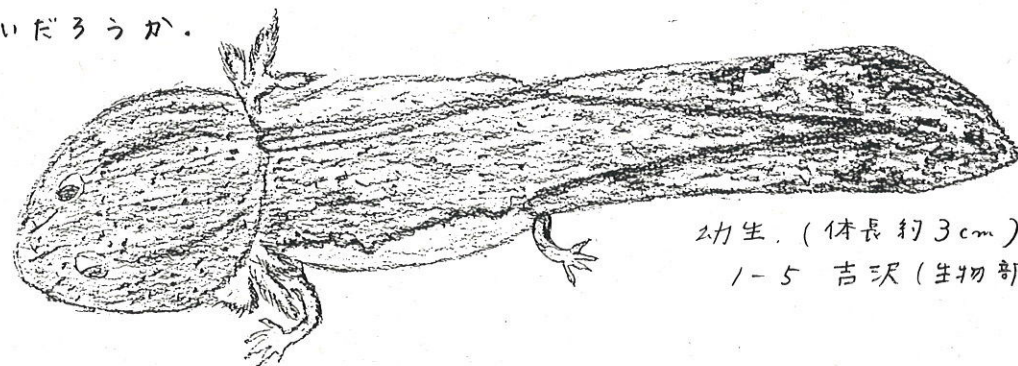
日光中禅寺湖畔
日本両棲類研究所

¥400

また、こんなことも言っていた。「生存競争は、先に生まれた大きな
個体が必ず勝つわけではありません。後から生まれた
小さな個体でも、強い者は最終的に成体になれるので
す。そして産卵地から陸に上り、4年後には、必ず
自分の生まれた場所に産卵にやってくるのです。しかし、もし
そこに産卵できる環境がなかったら、産卵することはでき
ません。緊急措置的に、近くの1雨でできた水たまりなど
に産むことはありますけどね。……」



先週（5月31日）、みかも山の周辺にあるいくつかの産卵地
の1つを、生物部員と共に調査にいった。その場所
は、1年前は、100個近くの産卵が確認された最大の産卵
地であったが、去年の7月、その全てがコンクリート製の側溝
に改修されてしまっていた。これで、ここも終わりかと思っ
たが、今年はその中に倍、200個以上も産卵してくれたのだ。
その幼生の成長ぶりも見に来たのだが、あまりのひどさに
悲しくなった。100m程の側溝は、約2mを残し、全て
干上がっていたのである。側溝の中には、白い花をつけた
雑草が、しずかに風にゆれていた。おそらく、来年も
この側溝にサンショウウオの親たちは産卵にくるだろう。
数十倍もの生存競争に勝ちぬいた小さなサンショウウオにとって
人間という最後の競争相手は、あまりにも巨大すぎるのでは
ないだろうか。



幼生（体長約3cm）

1-5 吉沢（生物部員）画